

## 性差心理学とその周辺(II)

島津 貞一  
(本学客員教授)

### はじめに

前回この課題で小論を述べた。そのときあ  
とがきにもふれたように、今回つゞいてもう  
少し展開してゆきたいと思う。この前と同じ  
ようなプログラムでおおよそ以下のように、  
逐次紹介、及び感想と小論をのべたい。

「性差」とはなにか——についてまだまだ  
論の多いところで、前回にものべたように、  
間宮教授のいう——“異性、男と女の違い”、  
そして、社会、文化的な観点より展開してい  
るのであるが——（教授の説は今回は省くと  
して）、一般には、おおまかにわけて、(イ)生物  
学、生理学的な観点よりの違い、(ロ)社会、文  
化的な立場よりの違い——などから論をのべ  
られることが多い。今回はこの二つのことには  
直接交錯してふれることが少なかった上に比  
較、論述することも省いてしまった。このこ  
とについては、やはり、触れなければならない  
と思う。だが、しかし、今は、社会、文化  
的な観点の方が次第により重要と見られ、又  
より時代的、即物的な課題と思われるような  
フシがある。それは随所に触れることにして  
（テーマは、性差心理学ということである）  
論を展開したい。

### §1. 「女性・その性の神話」 青木やよひ

青木氏は、「男らしさ、女らしさ」という言  
葉を聞いてみなさんは、まずどんなイメージ

をうかべられるでしょうか。もちろん、法律  
に明記されているわけでもなく、これを守ら  
なければ罰せられるという制度があるわけ  
でもありません（略）。——にはじまって、“泣  
かない、泣かない、ぼく男の子でしょ”、“あ  
なたって、男らしくないわね”などと口走っ  
たりする——という風に男性はかくあるべき  
だという“男らしさ”のステレオタイプ、“女  
らしさ”のステレオタイプが強固に存在して  
いる——と述べる。更に“女らしさ、男らし  
さ”は、私たちの意識だけでなく、行動まで  
縛っていて、結局は、私たちの生き方にとっ  
て、大きな規制力の一つになっているわけ  
です——と。

青木氏はこの“得体の知れないもの”を腑  
分けするという。展開されるのは、(1)性差の  
生物学的根拠、(2)文化としてみた性差、(3)性  
差と性役割と性差別——にわけて序論で問題  
を投げかける。少しばかりそれに触れつゝ、問  
題の中心、核をさぐりたい。すなわち「男ら  
しさ、女らしさ」とは、性についてのアンバ  
ランスの上に成り立った近代文化の徒花（あ  
だばな）のように私には見えるのです。人間  
の生き方が根底的に問われているいま、その  
再検討は、男性にとっても、女性にとっても  
現代の大きな課題の一つである——と序論の  
むすびのところで述べる。さて、ここにあげ  
た著書は青木やよひ氏の1982年の著作である  
が、女性問題について多年にわたる研究で、  
特に1975年度の毎日新聞社より“日本研究賞”

を受賞している。

本論に入る前に、氏の“性差”についてのさきにあげた(1)、(2)、(3)について少し紹介・説明をしたい。

#### “性差の生物学的根拠”について

まづイメージについて、男らしさとは肉体上のたくましさ、そうでないなよなよしたの女らしい。しかし意志の強弱による男らしさ、女らしさもある。また裁判官は男らしい仕事、ファッション・モデル、保母、看護婦は女らしい仕事である、と見られる——こうしたことからその時代の、その社会の男らしさ・女らしさのステレオタイプが形づくられるわけです——という。つまり(1)身体的 (2)気質的、態度的 (3)社会的役割——この三つがセットになっていて、それらすべてが性差の根拠を形作っている、と述べる。このことについて氏は更に細部にわたって(a)体格および体力における性差——は男女の性差については絶対的なものではない、と述べ、(b)気質および態度における性差——では男性は攻撃的、女性は受身的であり、これはホルモンの差によるものといわれるが、これも絶対的なものではないようです、と。生まれてから10年なり12年なりの間に、自分は男だ、あるいは女だと自覚して、身につけてしまった心理構造とか、行動様式というものは、ホルモンの働きがどうあろうと、すぐに変えられないということです。これは逆に言いますと、気質や態度などに現われる男らしさ、女らしさには、いかに後天的な要素が多いかの証明ではないか——と述べる(c)知能における性差——は、アメリカの心理学者、E・マッコービーの「性差——その起源と役割」においては、知能テストなどでは学令前は女兒の方が高い数値を示すそうです。男児は空間能力、女兒は言語能力にすぐれるが、決定的なものはないようです。いづれにせよ知能における男女差には、環境的なものが強く働く」と。以上により、生物学的性差というものについては、一方が子どもを産ませる性であり、他

方が子どもを産む性であるという生殖機能に関する差、以外には、絶対的なものはないという。

このようにみえてくると、性差に関する生物学的根拠が疑はれ、男らしさ、女らしさは作られたものであることが明らかになると、——のべて、その差の身体的なものはそれほど決定的ではないが、男らしさ、女らしさの文化的な差は、何千年もの、人類が作り上げてきたものだ——という。しかし、たゞし書きをして「下手をすると、男らしさ、女らしさのステレオタイプから男女がはみ出すことは人間性の否定であり、社会を混乱に陥れるものだということになりかねません」と断り、この文化的性差は絶対的なものではなく、その社会の文化的傾向や時代により、かなり幅のあるもの——として知っておきたいとのべる。

さて、問題は、氏は、“性差の通文化的比較”において民族的な特徴や時代文化にポイントを当てる。あの有名な、しかも神話ともいえる、マーガレット・ミードのニューギニアの三つの部族の調査——である。細部のことは省くとして未開社会の三つの部族のことについて三つとも、男性型文化や女性型文化もあり、どちらにも別がないというのもあり、で、いろいろ批判、反論もあるものの、次のヨーロッパの状況をもつて、紀元前、四世紀あるいは十六世紀そして現代と比較して、男、女の服装からみて強い・弱いの特徴はみられない——という。また日本を引合いに出して、十八世紀頃の歌麿の絵から、男性・女性の判別の難しさを言っている。

この辺りでは少し一考してみたいところもあるところで、マーガレット・ミードにしてもまた歌麿や男性の着物の裏地にふれてもいるが、これはまだ多角的な視点も要するものを含んでいると思われる——がいづれにしても、“文化的性差とは、人数の歴史と共に進化してきたと考えるよりも、社会の条件や文化全体の在りようによって変化”——とのべる。

ここで青木氏は「大量生産と大量消費」——

これは資本主義における、性役割は、差別による搾取のメカニズムの一端、とのべる。そしてアメリカのウーマン・リブのことにふれ、なかなか男女の性差についてもその運動によって社会は認めようとされてない。またよくいわれる言葉——セックス・ロールとジェンダー・ロールの使い分けも大切だと敷衍する。社会、とくに近代型社会は、「男らしさ・女らしさ」の度合い——これが貴族社会や武家社会の特徴をみると、いかにその文化的性差が強化されたかがわかると。「男らしさ・女らしさ」は、性についてのアンバランスの上に成り立つ近代文化の徒花（あだばな）といい切る。

以上で青木氏の「性差」についての概観と、これまでの世相にみられるこの性差偏見を打崩し、新しい方法論への展開を述べている。中軸となる大要と、世界的、あるいは国際的な潮流を紹介し、本論でくわしく述べている。すなわち、その内容は

- 1) 女性問題とは何か  
ボーヴォワール。ウーマンリブ。
- 2) 性差別の根拠をさぐる  
性と文明。甘えの構造
- 3) 女の視点で世界を見ると  
アメリカの女、日本の女 女の論理とは
- 4) 差別なき社会に向けて  
男の言い分・女の言い分

このうち、最も関心をひき、興味あるところの一つは「ボーヴォワールと第二の性」である。もとより「この10年来のアメリカのウーマン・リブ運動のリーダーたちはこの本から有形無形の大きな影響をうけており」とし、また、「(女性問題など存在しない。あるのは一部の女の行きすぎた自己主張だった)」というボーヴォワールの言葉。ペーベルの「婦人論」やJ.S.ミルの「女性の解放」と比べて、それは社会主義の到来と男女同権を言うのに対して、ボーヴォワールは、女性みづからが性というものをはじめて明るみに出し、性意識に合わせて一大女性論を展開したところに衝撃

力と画期的な意味があったといえる——とし、こんにち女性がみづからの性を語るのが流行のようになっているが、その起源はボーヴォワールのこの本にあり——と力を入れて述べる。またもう一つ、紹介しなければならないのは、「性差と性差別」のところである。

「男は外、女は内」という性による伝統的な役割分業制度の破綻、この矛盾。しかも性別が男でないというだけの理由で就職の門を閉ざされたり——自由、平等、博愛からは許しがたいはずだし、フロイトの「女性の解剖学的宿命」の神話はまだ力を失っていない、とする。そしてはじめの方で紹介したように、生物学的（第一次）性差、社会的（第二次）性差、そして生物学的差異とほとんど関係のないほど人間的に仕上げられた文化的（第三次）性差——ということが相互に関連しながら男らしさ、女らしさのイメージとなって定着するのだ、と述べる。

さらに青木氏は、「問題の一つは、(性差)と(性差の社会的利用)と(性差別)とが、私たちの間で混同されていること、あるいは分ちがたいものとして論じられていることである。つまり、((1)は女は産む性である＝第一次性差、(2)だから男女の役割は分けておくべきだ＝社会的利用。(3)したがって、女は社会的に劣った存在である＝性差別)という三段論法が、自明のものとして通用していることである。」、という説明はまことに明快であり、十分な説得力を持っている。すなわち、——性差と性差の社会的利用と性差別についての明白な自己認識の不足は、(特に性差、性差別肯定派においては)そのポイントをつくところであり、またその逆の立場に立つ派においても、ここで十分検討、反省(?)を加えるべきものと思われる。ここでは十分に(紙数のこともあり)展開、解釈は述べるのに限りがあるが、「はじめて私たちは性差とはなにか、という問題の前に立つことが出来る。それは一方では、男女両性の生殖機能の違いが、個人として見た場合、他の身体組織にそれぞれどの程度影響を与えるものであるのか、同時

にそれが、成長の過程で心理的・知能的にどうかかわってくるのか、あるいは、その結果、人間が女性であり男性であるということにはどういう意味があるのかといった問いに私たちを導く。」とつづけて述べる。このことについて、社会制度、文化慣習、それについての性差の社会的利用——ということに何度もくり返し強調している。男女間の性差ということや皮膚の色の差についても、その差別にならないような仕組みを考えない限り、自由で人間的な社会はありえない、とし、J.J・ルソーの「人間不平等起源論」が不思議な輝き、で理解されるような気がする——と。そして、(この項の)しめくくりとして、「単に現在問題になっている性アイディティティの混乱に対応するというだけでなく、私たちの未来にとって重大な課題の一つだ」と——述べる。

## §2. 「性の崩壊」 男と女の性差がなくなる時 上村くにこ

「性差がなくなったときに、男と女の関係はどう変わるのか……不安の種は尽きることはありません」という書き出しから著者は、人間誕生以来つづいた性の境界線がなくなれば、家庭はタガがはずれるし、職場、学校にもそれが浸透していくだろう、とものべる。

「いったい男とは女とは何なのか、父親・母親はまた本当に男と女は違わないのかという恐怖」とつづけてのべ、この問いに対して(研究)、行く先が、天国でも地獄でもかまわぬ未知への船出、旅への呼びかけに、出発といきませんかと勇を鼓して誘っている。

母性愛は「つけたしの愛」

「母性本能というのは、たかだかこの二百年ほどの間に、ルソーとフロイトの思想を推進力としてでっち上げられた神話にすぎない」という研究書が出たことを紹介——女性愛が生まれることもあれば、生まれないこともある。「母親の愛はいわば(つけたしの愛)にすぎない、ということから、本のタイトルも「おまけの愛—邦訳は(プラスラブ・母性本能という神話の終焉)」という題でサンリオ

から出ている——とつけられた」と、上村氏はのべる。

エリザベート・バダンテールの著書である。哲学の女史で、エコール・ポリテクニークの先生。フランスで出版され、世界中で翻訳された。こういう話ものべられている。ベッテルハイム(フロイト派の心理学者)が推薦文を依頼されてそれを断った。その文面は「母性本能が存在しないというのは本当です。母親に愛されない子どもたちをたくさん見てきたこの私が一番よく知っています。けれどもそれは口に出してはいけない真実なのです。母親たちがこの本を読んで罪悪感から解放されたら、この罪悪感でかろうじて守られている子どもたちはどうなりますか?」——という話。

こういう話——問題の多い発言をどうわれわれは受け入れられるのだろうか。それともそんなバカなと断手反対するのか、すべきなのか、日本では諸外国ほど騒ぎにはならなかったといわれる。この小論ではこうした大問題を論ずる場ではないか、さきにルソーについてひとこと紹介したが、ここでも述べることは重要なことと思われる。すなわちルソーは、「女性は子どもの身体の健康に責任をもたねばならない。女性の最大の責任は子どもを育てることである。それは女性のもつ唯一の名譽ある任務であって、子どもに授乳し、こまごまとした世話をするとともに、本来受動的でマゾヒストである女性の真の幸福がある」と説く。フロイトについても、ここでひとこと、「子どもが幼時に形成する無意識について母親には大いなる責任があり、母親の存在こそ子どもの一生を決定する」という。この二人の説をならべてバダンテールは母性愛・母性本能について種々反論を加える。これを上村氏は、フェミニスト等の反バダンテール説をあげているが、ここではそれをのべる時間はない。が、大変な問題として受けとめねばならないだろう。さて、私は、上村氏の性差についての論を引合いに出すことにある。ここに全く驚くような氏の論にぶつかる。すな

わち、“3人に1人の男が——男の出産——を肯定している。”という見出しである。

“もし、新しい医学のおかげで男性も子どもを産めるようになったとしたら、あなたはそれを進歩だと思いますか、それとも人間の冒瀆だと思いますか？”

“出産に関する法律がありますが、もし男性が妊娠できるようになったら、それを許可すべきですか、禁止すべきですか、それともそれに関する法律は作るべきではないと思いますか？”

これは1986年4月、フランスで16才以上の男女対象に全国アンケートの質問であるが、その結果、35才以上の男女の63%は男が子どもを産むなんて——恐るべき非道だと考え、13%は、人間の夢、と答えた。ところが35才以下になると、35%の男女が——進歩——だと答え、男の妊娠なんて、とんでもないと答えた人は46%と急減している、と。くわしいことは省くとしても、フランスのこのアンケートを日本で実施するとしたら、どんな考慮が準備されねばならないだろうか。

さらに上村氏は、“医学的には今すぐにでも可能”とフランスの生物学者の論を掲げている。——これは今“生殖科学、生殖技術”の最先端をいく話題のそのものである。さらに（女ひとり、あるいは女同士でも子どもが産める）、（動物が人間の子どもの産む）、（スウェーデンの人工受精革命）、（代理母と不妊の母の亀裂）——という見出しと共に、今後のそうした科学、その技術に男、女、オス、メスの人間について論じているのは自然科学の特に生物学の基礎的な概念にぶち当たるということになる。さらに男・女の意識革命というせつめいがあり、「サンフランシスコ市議会議員、ハリ・ブリットはゲイの議員としてあまりにも有名だが、下村満子さんの“男たちの意識革命”の中で、彼は次のように言っている。（いま、アメリカで起っているのは、男と女、男と男、女と女の関係の革命的な再編成なのです……。男が悲しいときは泣き、ときには弱さも素直に認め、他の男と性的な

関係を持ちたければ持てるし、セックス抜きにした女性との関係も持てる。さまざまなライフスタイルも選べる、そういう変化の波がきているのです）と引用し述べる。新しく形成される家族というのは、いったいどんな顔をしているのだろうか？——と、この項での上村氏の結び、である。ついで、アンドロジナス（両性具有）時代の始まり——性差のなくなった男と女の戸惑い——上村氏のこの本の後部の方では、そういうアンドロジナスについて述べられている。いまこのアンドロジナス——はこの日本において、生物学、心理学、社会学の方面でも社会相においてもその現象が（仮の？）見られはじめ、学問の方が先行している感がするが、ともあれあの有名な“ハイト・レポート”を引合いに出して、この両性具有について展開している。「男と女の不協和音はもろ我慢ならないところまできている。

（略）アメリカの女性は98%までが男性とのあり方に不満を感じ、変化させたいと思っているという。92%の女性は男性が——恩着せがましく、一段お高くとまった態度をとるとの不満を抱く、——95%の女性はパートナーから心理的・感情的虐待を受けていると感じ、79%がパートナーとの愛情関係にそれほど時間と情熱をかける必要があるかどうかどうかが疑問に感じている」とハイト・レポートのデータをのべる。さらに付加して「男性との愛情関係が人生で一番大切だと考える女性は、たったの19%にすぎない、87%の女性が一番深い感情関係を結んでいる相手は同性であると答え、5年以上結婚生活を続けている女性の70%が、——セックスのためというよりは、感情的接近を求めて——夫以外の男性と交渉している」。こういうデータから、いまアメリカの男と女のありようは互いに不信、愛のない結婚生活を、心の通わない、人間性無視(?)の人生を送っているのだろうかと言かる。しかし近時のアメリカの家族崩壊のニュースやデータなどを見るにつけ、人間性についての哲学がゆらぎはじめているという別のニュースも肯かれるところである。上村氏はこの本

の第7章において、先にあげた、バダンテールの「意外なことに、これからの恋愛関係のモデルに、無条件な共生関係を前提とする“母と子”の関係をあげたのはそのためだろう。——これからの男女関係には近親相姦のにおいがする——“男も女も、今ほど慈しみという乳を求めている時代はない”とバダンテールの言をあげている。さて上村氏の説を急ぐことにして、「女性が女性としての性アイデンティティを確立するよりは、男性が男性としてのそれを確立する方が、はるかに複雑で困難であるということが、さまざまな研究分野で次々と証明されてきている」とのべる。そのくだりは——“人間の脳そのものが女性の脳が基本型となっている”という。つまり男性型の脳は女性型の脳の改造品だという。この辺りは大脳生理学者の大島清氏や同じく新井康允氏の論述を対照しなければなるまい。

上村くんにこ氏はフランス文学専攻、甲南大学文学部教授である。

### §3. 「セックス&ブレイン」 ジョー・ダーデンスミス+ダイアン・シモーヌ(女と男の科学最前線)

ジョーはイギリス人でジャーナリストである、ダイアンはニューヨーク州立大学院卒、保護観察官を経て著作業へ——、さて、

この書物にこういうヘッドラインがある。  
(男と女がしなければならないことはひとつしかない。人間は動物であり、自然界の一種であることを肝に銘ずること。男と女のちがいという事実を卒直に認め、男女共同のプロジェクト——生殖——に社会的意味をとりもどすことだ。)

しかも、さらに、(男は身体的に女より強い、女は生まれつき男より感情的だ。)男と女の差異には、いわれなき神話が多い。そして、性差は学習による、社会的・文化的所産だとするみかたに、彼らは男女ペアの科学ジャーナリストが、最先端の脳科学からアプローチを開始する。(略) 1980年代、脳科学は“女と男”の新しい物語を始めようとしている、と

いう。さて、アメリカの性差心理学者のJ博士のクイズをここにのせて、御参考に供したい。

- 1) 男は女より男の友人を信用する
- 2) 男も女も、親友に期待することは似たりよったりで同じだ。
- 3) 男が女より攻撃的だというのは神話にすぎない。
- 4) 男と女の攻撃性がちがうとしたら、育てられ方と環境のせいだ。
- 5) どんな社会でも、男は身体的に女より強い。
- 6) 男性の脳は大いて女より重いので、男の方が女より知性が豊かだ。
- 7) 女は生まれつき男より感情的だ。
- 8) 男と女のユーモア感覚は同じだ。

どれ位“イエス”か“ノー”か。この心理学者によると意外な答えになっている。「男と女について知っている」ということに私達は少しは考えこまざるを得ないかも知れない。さて、ジョー氏とダイアン女史の共編著であるが、「この本の素材の多くは、いまだに論議をよんでいる。男女に根本的差異があるというだけで、社会正義に反しているという良心の呵責、やり場のない怒りをいまだによびおこす。さらに男女の差異は生れつきで、誕生前に脳という器管に刻まれているなどというのは犯罪だと見る人が少なくない。それは偏狭であり、科学の主流、心理学と社会学の体制が明らかにしたという真実に反するのだ」とボールを投げる。つまり科学は、脳科学においては、明日にも新しい発見や検証を見出すかも知れない、との立場により、いづれに、問題を課すかという——この本は探偵物語——だという。しかも現代の脳科学は、男女、すなわち人間の問題であり、まずこの偏見をうちこわしつつある、と序言で宣言している。

この書物で最も問題になると思われるところの一つ、二つを引出し説明を加えたい。

“アマランター族の性転換劇——女の子として適応できない!?” つまり述べるところは、「ニューヨーク州立大学のリチャード・グリ

ーンが診た患者は、誕生時の性器は不明瞭で女子として育てられたが、子ども時代自分は男だと主張し、人形を投げすてトラックにしがみついた。彼女は極端なおてんばで、男子だけの仲間集団を作った。又カリフォルニア大学のボブ・ストラーが診た患者は、外見は女子として生まれ、女子として育てられた。しかし彼女はほぼ10年間男子としての扱いを求め、思春期にその自己主張を証明した。彼女は体内に精巣をもっていた。」またドミニカの子どもたちにも例があり、女性から男性へ、やはり大した問題もなく転換したといい、またニューギニアの転換の話題をあげる。脳とからだの性のちがい——性ホルモンのポイントをのべる。しかしハワイ大学のミルトン・ダイヤモンドは男子双生児（アメリカにおける）例の、女子として育てられ（外科的に）うまく育っていることについて——「このケースについては、はじめから信びよう性を疑っていた、性のアイデンティティには自然がとても重要な要因だと思う、性的多様性の土台は子宮の中で決まるのです——と力説する。つづけてその男子双生児の、精神医も——深刻な心理的問題がある——とのべているとし、ジョン・マナーにこの経緯を伝えたところ（前回の性の署名の著者）彼はこれには触れたがらずインタビューを拒否。このケースは其後も引きつづいて問題となっている。

「性の署名」以後のこのケースは何をわれわれに物語るのだろうか。手術の失敗から一人の人間の性を変えてしまう場合を考えるとこれは慄然とするし、あの「性自認」の門戸がどちらの方向にも転換可能～とは？われわれは～そしてこのケースに再び（本書で）ぶつかるわけで——科学の名において人に対してなされる行為は最大級の慎重さが肝要と思われる、など科学と人間についての深い思慮——というものを考える。

新しい視点をここに展示したい。このような脳科学の新しい発見などと共に、以下に述べる「科学」にわれわれはどのような知識と見解を持てるだろうか。すなわち、——「去

勢した男性の平均余命は女性なみ」——とか、——「情緒障害、狂気、犯罪の源」——など。つまり曰く遺伝子がすべての異常行動の原因、源としたり犯罪行動は遺伝する、とか、女性殺人者無罪放免、月経前緊張症が原因と精神科医——とのマスコミの報道は連日のようだとも言えるし、もっと甚しいのは「文化もパーソナリティも脳化学もじつは同じ。視点がちがうだけだ」という科学者もいるという。前者の女性なみの平均余命は肯かれるところで、アメリカ、ニューヨークの医療センターの医師らによって示されているという。性ホルモンのせいだという。ついで、この性ホルモンによる次々に新しい説が打出され、もはや「心理学的」被造物ではなく、生物学的存在だと、この著者らはいふ。これまで男と女、ということになると、心理セラピスト、精神科ドクターへととびこむが、もうこういうゲームは終わり、新しいサイが投げられ、科学——が静かに宣告しているともいう。又たとえばストレスへの反応、情緒障害、狂気、おそらく犯罪さえ、その源と発現は生物学であり、脳が元締だと。つまり「男と女のべつべつの化学」へと展開して述べている。この展開と例示はもっともらしく述べられているが、脳科学の一方的学説に特性をかけた過ぎていることは確かだと私は思われる。しかし更に次のような説明は説得的ではある。

「さらに性別にもよる。いわゆるAタイプ人間は、慢性的に時間に追われ、外交的で攻撃型、精力的で競争好きだが、とくにストレスに弱い。しかも、これはAタイプの男性だけにあてはまる。最近のスウェーデンとアメリカの研究では、Aタイプの女性が仕事上の問題を解決するとき、Aタイプの男性のような心拍数、血圧、コーチゾーンノルエピネフリン系の上昇を示さない。（アドレナリンも増えない）。ただしAタイプの女性や女性一般はストレスに反応しないという意味ではない。化学がちがうというだけだ。」といい切っている。これは生物学的、生理学的なサイドの科学であり、他の社会学的心理学的サイドを全

く打消しているわけである。しかし、これまでの脳科学の証明は多くのそうしたデータを展開・証明はしている。

「この全体的なちがいは、いったい何故なのか？そしてその答えは、ここでも男女の発達を左右する進化上の圧力にある。男はハンターで、セックスの競争者、つまりギャングラー。危険に直面したとき、すばやくたくみに行動するメカニズムで恩恵をうける。女性は、集団の中心であり哺育者である。環境への情緒的反応が有効になる。」とし、なお、たとえば、「高等動物では、テストに直面したAタイプのオスの人間のように、高レベルのテストステロンをもつこともわかった動脈硬化を人間のオスの大問題にするのはテストステロンだからだ。又、(女性のエストロゲンは、コレステロールをもっと有効に拡散するタンパク質を作る)と述べる。著者はさらに、「女性の抑うつを解明する」、「性殖機能とかかわる食欲不振症」などいづれも女性の性・心理機能との関連について述べ、「抑うつについても同じことがいえる。人間の進化史上、ひとりきりの女性は生存できなかった。狩猟に十分適応していないからだ。そこで自分と幼児のための食料供給を最大限にするには、社会集団の相互依存型存在でなければならなかった。じつに、女性は集団をまとめるのに必要な接着剤であった。となれば、ストレスに対する抑うつ傾向は、女性の相互依存性を強化し、助けを求めて集団にもどらせる。緊密な社会集団はあったとしてもマレだ。助けを求める叫びはあっても助けはこない。少なくともある研究によると、抑うつは、西洋諸国に疾病のように広がってきた疾病なのだ。」とこの項は結んでいる。さて、これは生物、生理学的要因と状態——と社会的心理学的な人間生息をないまぜにせつめいをしている上に、科学的立脚点に立つ(自然科学の)オス、メスとしての人間と、男性、女性の性差について、や、明瞭を欠く論述ではないかとの疑問を持つ。これははじめの方で断っているように、この本は探偵物語、といい、安易に解答をだ

さない、とも述べている。しかしこの本の終章辺りからは「女と男のターニング・ポイント」の章において、(男女の再統合にむけて)において、「男女の差異をうけ入れ、知り、評価してはじめてうけとめられることだ。女性は、子どもを生みたかろうが、なかろうが、母親になる者として保護されている。男性は好むと好まざるとにかかわらず、狩猟者、性の探求者として作られる。男性は女性より不安定で多数だ。女性の方がバランスがとれている。」と述べ、「男女の差異、脳とからだ、遺産能力、弱さと免疫のちがいは人間の生物学の基礎である。」として生物学的進化と文化的進化、それぞれの原動力を見つめつ、「この差異を無視し、同じだというふりをするなら、結果的にお互いを無視し、将来の問題を共に解決できなくなるわけだ。もしそうなれば、家庭へのたたかいは結局敗北する。生殖は少しずつ科学と産業にのっとられる。男女のちがいは無意味で、セックスはゲームになる——恐るべき新世界——がいつの日かやってくる」と結んでいる。

#### §4. 「脳から見た男と女」 性差の謎をさぐる 新井康允

男と女では身体に差がある(当然のことであるが)。では脳にも、男と女で差があるのだろうか？最近の生物学の研究から、脳に性差のあることが、ほぼ確実になりつつある。著者は、「我々は、男と女の考え方に何か違うところがあるのではないか、行動にも違いがあるのではないか、なんとなくそう思っている。男と女の心に、生まれつきの違いがあるのだろうか。違う点があっても、その多くは現在の男性優位の社会的風土が作り出したモデルだという主張がある。これはかなり説得力のある主張だ。しかし男と女ではいろいろと身体的な差があることも確かである。では脳にも、男と女で差があるのだろうか。」と述べ、最近の生物学の研究結果より脳に性差のあることは事実、といい、ヒトもそうだとしたら、男と女の心の違いを理解する手がかりになる



のでは、という。さて、こうした点から、以下のような話題をのべたいと思う。

アメリカのモンタナ大学の調査によると、女子学生の92%はキャンパス内における行動をみると、本やノートを抱える持ちかたは、片手か両手で抱えるようにする、という。しかし男子学生の95%は指を本やノートの下縁にかけて小脇にかかえるように持つか、あるいは、手にもってぶらさげる——という。男女差が見られるのは何か——指や腕の力の男女差は体つきの差に関係あるのか、女性の骨盤の特徴によるのか。男性の持ち方と比べると女性のそれは閉鎖的であり、男女の心理的な差がその要因になるのか——こういう普通のよく見られる光景、状況からみても男女の差があるのは何か——幼稚園、小学校低学年では見られず、後年中学生頃になると変り、高校・大学になると女生徒は女性型に定着する——これらは思春期の発来と関係、女性ホルモンによる、女らしい体つき、骨盤や胸の発達と交叉すると思われる——と新井氏のせつめいである。こういうくだりは、“たべもの”の差、“男の声と女の声”にも比べられ、体の大小などと共に、その違いを序のところで述べる。次いで新井氏は、“性染色体の組合わせと性”、“体の性の分化”とそして“脳”についてその機能、構造及び発達に論が展開している。

#### 「男の脳と女の脳」について

この章の中で最も関心がひかれるのは、——自分の性を認識するとき——において「出発点の性の判別は、外性器の特徴という生物学的規準によって行われるにもかかわらず、それ以後はすべて社会的・文化的規準によって置き換えられてしまう。したがって、生まれつき男女で異なる行動以外にも、作られた行動様式がたくさん加わっているのに注意しなければならない。(略)家庭や社会での学習によって、性役割や性の自己認識のでき上がる過程で、アレドロゲンのシャワーによって決められた脳の性はどうなるのだろうか。ラットなどの実験動物では、アンドロゲンに

よって脳の性が決まると、その性に成熟後の性行動が完全に支配される。ヒトの場合、脳の性が学習によって大幅に修飾されてしまうのだろうが、これは認識という人間固有のものを含んでおり、動物実験の結果からは類推が不可能な問題である」と。さらに肝要な点を氏は指摘している。ヒトの性周期（月経周期）の有無は男女ははっきりしていることは脳の機能的な差のあることを言い、男が女にひかれ、女は男にひかれるのは、原始時代から現代社会にわたりくりかえされておられ、社会での学習の成果によるものとは考えられない。学習を受ける脳の中に男と女がいるのだ——と述べる。またついで男の子の遊び、女の子の遊び——のところでは、子ザルの遊び行動のしらべから、ヒトの子どもと似かよったところがあると次のように列記している。——子ザルの遊び行動における性差がある——

1) 精力の消耗の仕方。雄ザルの方が活動的、行動が無鉄砲。ヒトの男の子の方が活発で屋外の遊びを好む傾向を示すのと一致。

2) 社会的な攻撃性。追いかっこや威嚇行動のマネ。ヒトの場合は言葉でのけんかも含まれる

3) ママごと遊び。雌ザルは思春期が近づくとつれて、小さい幼児を相手に遊び、母親のような役割をする。一種のママごと遊びと考えられ、女の子が自動車、飛行機のおもちゃより人形を好むのと似ている。

4) 遊び仲間。子ザルの遊び相手は、同性同士がグループを作る。ヒトでも男の子は男同士、女の子は女の子同士で遊ぶことが多い。

さて、ヒトの性役割のでき上がっていく過程で、どの程度、生れつきの脳の性が役割をもっているのだろうか？ということについて、新井氏は、「性役割は、社会的、文化的要因によって決まるという学者が多いというが、男の子らしい遊びとか、女の子らしい遊びというように社会的習慣として分類しているものの中にも、出生前の脳の性に根ざした生れつきの男の子、あるいは女の子の行動パターンが含まれていることに注意しなければならない

い。したがって、子供の行動様式の男女差は養育と出生前のアンドロゲンの作用との相互作用によってでき上がってゆくわけで、脳の性は性役割の分かれて行く方向づけに重要な役割をはたしていることがわかる」と言明する。ついで展開しているのは、男の心と女の心——と題して、大脳皮質の機能に左右差のあることを説明し、左半球、右半球の差の“個性化”を述べ、ロジャー・スペリーらの研究より判明したこと、と共に、大脳皮質の機能の男女差をのべる。たとえば脳卒中などで左半球が傷害をうけて失語症になった場合、男性より女性の方が回復率がよいこと。これは言語機能の男性より女性の方の処理能力の差があること。知能テストでも“言語性テスト”においては男性より女性の方がすぐれ、逆に男性は“空間認識テスト”がすぐれているなど、性差のあることを述べる。ではなぜこのような大脳の左右差の性差はできるのかということについて、新井氏は、二つばかり興味ある説を引出している。「男性が空間認識の能力にすぐれているのは、原始社会において男は狩人であり、的を射るには遠近感にすぐれていなければならなかった。その条件に対する人類の適応の結果、男が空間認識でまざっているのだと説明する人類学者の話。また、男の子の脳より女の子の脳の方がやわらかく、空間認識機能が右脳へそれ程集中しない代りに、言語機能で左脳の過程で左脳ばかりでなく、右脳へも入り込む余地があるのかも知れない。だから女性が成長に傷害を受けても言語機能の障害が軽くてすむ場合があるのだらう。逆に成人になっても、女性で空間認識テストが悪いのは、右脳に入り込んだ言語機能の働きが、空間認識機能のじゃまをするのだ」と述べている。すべて大脳の皮質における男女の機能差を説明している。やはりロジャー・スペリー以来の大脳生理学の急激な機能の発見で次第にこの面における新しく解明されつゝありと言える。また付け加えて——“脳の血のめぐりは女性の方がよいか?”とか。“大脳両半球の連絡回線にも男女差あり”と

か、“男と女の利き足の対比と性差”を紹介している。こういうところから、この大脳の“個性化”を認めると共に、「心は、大脳皮質や情動脳としての大脳辺縁系や視床下部の神経回路の形成と平行して生まれる」とい、切る。しかし「性差の見られる神経回路は脳全体の配線図からすると、ごく細い部分であり、ヒトのように大脳皮質が大きく発達し、その配線が複雑化している場合にはなおさらである。したがって、神経回路の配線に男女差があってもそれが脳の精神作用を根本的に変えるものではないし、脳の機能の優劣を左右するほど決定的なものではない」としつつも、「ヒトという種属が保存されるためには、脳の機能構造の性差は必要だとし、それが男女の人生に彩りをそえ小説、絵画、音楽のような芸術の中に波及して、人類文化遺産を生むのにも貢献してきた」と結んでいる。なお付け加えて、“絵から見た男と女の脳”や“体と心の性差”そして“心の病から見た性差”は、いずれも新井氏と他のそれぞれの専門家との対談であるが、非常に興味深く、大いに関心を持たざるを得ないところである。

新井康允氏は東大理学部生物学科卒、東大脳研究所、カリフォルニア大(UCLA)脳研究所、順天堂大学教授、脳の性分化専攻。

#### §5. 「女の脳・男の脳」 大脳生理学が明かしたこの驚くべき性差 大島清

著者は、「唄にも歌われているように、男と女の関心は、たしかに“深くて暗い河”がる。肉体的な相違はもちろんのことだが、行動パターンや思考の形態も大きく異なっている。女と男の違い——それは、じつは脳の違いなのである。(略)さて、男女の差は“脳の差”だと述べたが、では、具体的にどこが違うのか。たとえば男性が見かけと違って、女性より精神的にもろかったり、心筋梗塞になったりしやすいのは、たくましく生きてゆくための、動物的な感覚を司る大脳辺縁系(旧、古皮質)と呼ばれる部分が女性の方がしたたかにできているからである。また、右脳と左脳

をつなぐ脳梁という通路にも男女差があつて、その結果として、男性は片方の脳だけを使うようになりやすい」と、まえがきにのべている。大島氏はこの大脳辺縁系と“男と女の問題”が最も重要な課題だと、この研究に深くかかわっているともしいう——。

大島氏のこの著書の中から“性差”に関係する、この性差心理学にスポットを当てて引合いに出しつつ述べたい。とにかくあくまでも、大脳生理学であり、いくつかのテーマに見られるように、たとえば——“男女の違いは脳に原因があった”、“男女の闘いは、新皮質と大脳辺縁系の闘い”さらには、“第二の脳——五感の構造と男女差”、“Yの悲劇・男はなぜ弱いのか”そして“オーガズムは大脳と性器の共同作業”等の如く相当しげきである。

大島氏のこの本について、そのいくつかを性差心理学と関連のあるところを列べてみたい。

1) “女の脳”が改造されて“男の脳”になる——男女の違いは脳に原因があった。

「とにかく現代医学では、脳は男性と女性によってその構造と機能が根本的に異なり、男脳、女脳として峻別されている。同時に、外見的、あるいは内見的に、男女にあらわれる差異は、究極的にはやはりこの男脳、女脳の差異に起固していると考えられているのである。よく人間らしく生きるなどという。人間らしくという言葉は美しいが、じつに曖昧な言葉だともいえる。厳密にいうならこの世の中に、抽象的な“人間”は存在しない。男性と女性がいるのである。そして男性を男性たらしめているのが男脳、女性を女性たらしめているのが女脳である」と。

氏は抽象的な“人間”は存在しない、ともいう。ついでウーマン・リブの運動のことにふれ、日本では鳴りをひそめたともいう。しかし運動はひそめても今は——家で皿を洗う、子守りをする、炊事を交代で受け持つなどのあのフェミニストの隠然たる動きは黙視し得ないところといえる。又“スポック博士の育

児書”にもふれ、女性だけの育児の役割は不平等とのスポック理論はかえって親と子の心の離れや親、夫婦の人生エンジョイと裏はらな結果を招いているともいう。まあ、氏の“性差”は脳にすべて原因がありという。(また性差は、性差別のことではない。と断っている) いわゆる、性差というのは、純医学的な男性と女性の性の差であり、性そのものの構造的な差といってよい、と。いわゆる“社会における性差別”や、“職場における性差別”とは別の状況だともいう。

——氏の性差をつくるホルモン、プロラクチン——というところでは、「このホルモンは男を筋骨隆々、ヒゲ面、女をまろやか、すべすべにするといった肉体上の性差だけではなく、精神面の性差をもつくる。母性本能の延長線上に、女性特有の感情のまろやかさ、細やかさ、オス型プロラクチンは攻撃的、活発な性格をつくる」という。その他、情報人間に男が多いのも脳が原因、男に自殺者が多いのも脳が原因とのべる。

この様に氏はすべて“脳”の存在、つまり、その機能構造にかかわってくることを多くのべる。さて氏のこの著作についてすべてにわたって引合いにするのは大変である。しかし心理学の分野で関心、興味あるところを紹介しなければならない。

——マズローの心理学の五つの段階。

- 1) 生理的欲求
- 2) 安全の欲求
- 3) 所属と愛の欲求
- 4) 承認の欲求
- 5) 自己実現の欲求

「マズローは、高等動物の全体像に迫り、単なる心理学のワクを超えて、人間それ自体の問題に回答を出したものといえよう。ヘビ、イヌ、ネコの脳から人間の脳の構造、男脳と女脳の構造といったテーマにも見事に照合しているのである」とせつめいしている。簡明にせつめいは出来ないが、“脳”の構造に照し合わせてこの五段階は生物の発達とも照合できるし、いうなれば、“女のホンネは——大脳

辺縁系を満足させたい”にあるとし、“新皮質は、男の独壇場”とものべている。すなわち、

大脳辺縁系——女>男

新皮質——男>女

のような構造的な分類ができる」と。

なお、また——「男は“アナリシス”(分析)、女は“アナロジー”(類比)」と表現したのはアレクシス・カレル。」とのべる。

この著物の問題になるところは、「母性愛も女脳の化学物質から生まれる」や、「Yひとつで決定的な違いが生じる」。これらは、純化学的なせつめいであるため私には十分な解釈はむづかしいが、あの性染色体の、男性か女性かを決定する仕組みや、段階が重要であるという。このY(性染色体の)のありようによって、あの“Yの悲劇”(エラリー・クイーン)も肯かれるところ。男性の生命力は女性の半分、XとYの差による男脳、女脳の特徴。そして“男性と女性では性欲中枢が違う”最後に氏の注目される「女性がドライ、男性がウェットなわけ」——のところでは、大脳辺縁系の男性・女性のを、対比し、女性の方が男性より強靱、だと。つまり、より動物的で、たくましく生存してゆくという。大脳辺縁系と新皮質の対峙、及び闘いか、男性・女性の脳のありようではないかと思われるとしている。そして最後の氏の言葉は——結局、オスはメスに動かされている——と結んでいる。大島氏は京大名誉教授で京大霊長類研究所、東大理学部、医学部卒

#### §6. 「ウーマン・オブ・トゥモロウ」 キャシー・キートン

著者のキャシー・キートンは南アフリカ生れ、英国で教育をうけ、「OMNI」社の社長で、“アメリカ出版界の最も優れた女性”に選ばれた雑誌界のトップに比肩されている。

「これは私たちの未来についての本である。女性の未来についての本である。予言ではなく、実現可能性についての本である。」と、はじめに述べる。彼女は、力をこめているのは「私たちは今日、過去よりずっとよい機会に

恵まれている。この本は女性が気にしている健康、セックス、男性、仕事、子供、家族、家庭などについて述べているが、同時に長い間、多くの女性が“男の領域”だと思って無視してきた科学技術についても述べる」と。そしてキャシーは『オムニ』の社長として、科学・美術などこの雑誌の中で、多くの人に接して得たのは、——女性は、科学に私ほど熱心でないということが明らかになった、と洩らしている。そこで女性のこの現実を知るために、科学・医学、また職業的興味から男性から何を期待するか等々の質問を發して25才から44才の大学卒以上世帯収入15,000ドル以上の女性に調査を依頼した。これらの得た回答はもちろん代表的な数値ではないが、他のグループの女性たちが未来をどう見ているか、十分推察できるヒントを与えてくれたとのべる。全篇は4章よりなっており、この“性差心理学”に大いに参考になると思われるところを引用、この小論に今後のいわゆる“フェミニズム論争”や“ウーマンリブ運動”さらに“女性差別シンポジウム”などの研究に大いに資したい。

「これらの科学・技術の力は私たちの生活のあらゆる面を変えるのであり、しかもこれらの力によって最も根源からめざましく変わるのは女性の生活なのである」、「どんな職業についていようと、女性はテクノロジー音痴にとどまっていってはならない。それどころか、科学技術分野での職業を開拓していく必要がある」しかし「増加する科学音痴の問題に直面している国では、女性の方に音痴の割合が高い」と。

以上のように未来に向けての生活に対して女性が科学技術に劣っているとの感を抱いているのは著者キャシー・キートンのみにとどまらず、先にのべた数章の中にも見られるところで、と。——これが女性の“性差”の中心の課題にあるのではないかと私見する。さて、内容に入ると、「男と女の赤ん坊は単に生殖器の相違にとどまらず、本来的に備わった相違をもってこの世に生まれてくる。差別な

どなくとも、性はわれわれ一人一人の世の中の知覚のしかたや、その中での行動のしかたに影響を及ぼす。それは基礎的な生物学の事実であり、性差別ではない。」また同じく「どの赤ん坊も、特定の傾向ないし、好みを持って生まれ、ある光景や音に対して、他の生物に対してより強い関心をむけ、またあるできごとにより強い反応を示し、またあることがらをより容易に覚えたりする先天的な行動がある」、「どの子にとっても、この相互作用の最終的な結果がその子だけに特有の脳なのだ。そして、その子が女の子なら、結果は、平均的にいって男性のそれとは全く異なる女性の脳になるのである」——と切れることなく述べる。

キャシー・キートンは、しかし最近の“女性解放”の各種運動についても耳痛いことをのべる。

「初期の女性解放運動も同じテーマ（女性は体質的に科学に不向きだ、ということに反発）をとり上げた。男性も女性も同じものを欲し、必要とし、尊ぶ。私たち女性にも同じ機会があたえられれば、仕事でもライフスタイルでも、男と同じ選択をし、男と同じことをなしとげる、と。」このことについて、キャシー・キートンは、前提が間違っていると指摘し、「男のようになるということではなくて、自分自身の知能や価値基準や感じ方で未来に影響を及ぼすということである」としめくくっている。ついで、著者は脳について力説するところ、先に述べた、新井氏と大島氏の生物学的、大脳生理学見地と同じ所見を展開している。

「わかっていることの第2のカテゴリーは男女の脳に実際、肉体的な相違があること、また男性は右脳的、女性は左脳的との見解、それはそんな単純なものではない」とロジャー・スペリーの成果を示し説明を加えている。

さて、この小論は“性差”を述べる心理学の研究である。やはりそのことにスポットを

おくのが中心課題で、キャシー・キートンの未来図の前の“女～”について述べねばならない。ロジャー・スペリーの示したように、また「人間の脳の構造について発見されてきた主要な性差はまた、女性の脳が男性ほど専門化しておらず、左右両脳間の統合や連絡の度合いが男性より大きいという可能性と実にうまく一致する」とのべている。また——“イヴのあばら骨”——のところで、遺伝子やホルモン、脳の構造については、先の章でのべた、新井氏や大島氏のそれと一致する。

次の章に展開されるのは、セックスにおける男女の差について長々と述べられている。題して“性的戦略”となっているが「男性は、女性の行った繁殖動物の賜物だ」——ハーバードの人類学者アーボン・デボウ——の言葉を引用したり、「女性がセックスに男より用心深くて慎重だからといって、受動的に違いないとかもっと極端に単婚主義に違いないか思い込まないでいただきたい」とも言う。“ハイト・リポート”より多く引用しつつ、「相手が、同じものに反応しないからというだけで、女は男をいやらしくよこしまだと決めつけ、男は女をセックス嫌いで神経質と決めつけて、互いに相手を非難したり、嘲笑したりするようなことは将来なくすべきである」——としているのは、まだ現今の世相でこのメッセージが理解されていないともいう。この章の終りの方では「もう後戻りはできない。私たち女性は、今や自らの性を思いどおりにできる。だが得たばかりの性的自由をどう扱ったらいいのか、まだ決めかねている。また、男性も、経済的にたよられなくなって女性に対する支配力が減少した今、自分たちが、女性から何を求められているかにとまどっている」と結んでいる。さて、この後の章では、“2000年の家庭”について、展開している。この本の中味の濃いところではあるが、この小論の課題より少しずれるところも多い。しかし見通しとしては全く創造的で啓発的でもある。

## まとめ

これまで、特に今回は別して外国のこの性差、その周辺のもの、わが国におけるそれらの少い著作を見て来たが、未だこの性差についての識者（この方面の専門家というか）等は、やゝ自説を深く掘り下げるあまり、少し偏奇している傾向があると思はれる。以下追って少しばかりのまとめをしてみたい。

1) 青木やよひ氏の“ホルモンの働きがどうあろうと、すぐに変えられないということです。これは逆にいいますと気質や態度などに現われる男らしさ、女らしさには、いかに後天的な要素が多いかの証明ではないか”と述べ、“このようにみてくると、性差に関する生物学的根拠が疑はれ、～”という。心理学的な、たとえば知能における性差と生物学的なこの特徴についての（例えば身体的な）対比は少し、結論を急いでいるかに見える。文化的性差ということや、現代資本主義の社会のニーズや、女性解放運動の起こりを力説し、未だにそのウーマンリブ運動の成果の実らないこと——近代文化の徒花（あだばな）と、やゝ皮肉っている。また“性差、と性差別”について、さらにこの性差の社会的利用に対しての論もきびしい。人間が女性である、男性であるということにはどういう意味があるのか——というところはちょっと考えさせられる。フロイトやルソーの論には今どきの“性差論”をもって力づくよく反ばくしている。

2) 上村くにこ氏の、“性差がなくなったときに、男女はどう変わるのか”という言葉はまことにショッキングな表現で書き出している。よほどこの性差の根拠や社会的支配のありように反ばくしたいところだろう。しかも、いったい男とは、女とは何なのか、は前の青木氏と同じ課題を基本にもっている。しかし、母性愛は、つけたしの愛というバグンテールのを引用してそのまゝの同じ哲学に立っている。ついで、将来医学の進歩が示す男性の妊娠ということについても、人間の男性の構造について、今、社会の運びとが考えられない

ロジカルにでない、その故にこそ非人間性的な発想が出てくるのは、どういう思想なのかと訝かる。しかし、思っても見なければならぬあの試験管ベビーから今の代理妻や、また人工で、すべての自然のルール(?)に反する性のメカニズムが覆えされる現在、あながち、男性の妊娠も非現実とは言えないのか——と空おそろしくもなる。アンドロジナスの（この1994年代においても）現存するともいわれる（社会生活、態度等において）いま、これも空おそろしくなる。性——性愛の基本がくつがえされる時、と上村氏はいう。そしてただ男性のアイデンティの確立をのみ叫ぶのは、やゝせっかちの論というべきか。

3) 「セックス&ブレイン」のところでは、いろいろ紹介しつつ、脳科学と社会文化面に観察される状況を対比しつつ、やはり、脳科学のきびしい実在は認めざるを得ないのではないか。その出発点の解釈のあり方が如何様な文化、社会面に出現するか、しかし、やはりいづれにしても「この差異を無視し、同じだというふりをするなら……」に表現されるように、男性女性の共に問題の解決に向はないと、恐るべき世界の到来、と警鐘をならしている。

4) 新井氏の脳——男女、はあくまでも脳における性差を認めている。行動、思考などすべて脳機能の作用で、結果はやはり性差がある、と認めざるを得ない、という。生物学的所見においても同様であり、オスメスのサルの研究から興味あるデータはとにかく、一応の明確な所見といえる。心理学に関しては、空間認識と言語性テストの話題も同じく定説となっている。たゞ後の方で、個性化の話は新しい今後の問題の鍵になるのかと思う。

5) 大島氏の女の脳、男の脳、においては、性差はすべて脳の違い——と明瞭にせつめいしている。その最も基本的となっているのは、大脳辺縁系（旧古皮質）にありと。大脳生理学に鍵があり、性差の問題、疑問は全て——脳にあり——を繰返している。加えて、ホルモン、特にプロラクチンという性差を示して

いるこのホルモンの作用が、行動や性格などを見せている。そして心理学との大いなる関連事項として、マズローの心理学を引合いに出し、あの五つの段階(?)は、実は大脳内の古い皮質から新しい皮質への段階であり、男脳女脳の(特徴)を見事、照合していると賛意を示している。つまりは脳の男女差を認めているわけである。大脳辺縁系と新皮質、がそれである。なお性染色体にもふれ、X、Yについて、その構造、作用、についても語り、“すべては脳にあり”といい切っている。

#### 6) キャシー・キートンについて

“性差”についてキートン女史は“生殖器の相違にとどまらず、本来的に備わった相違をもってこの世に生まれてくる”“差別などなくても、性はわれわれ一人一人の世の中の知覚のしかたや、その中での行動のしかたに影響を及ぼす。それは基礎的な生物学の事実であり、性差別ではない”と明瞭に言い切る、また“男のようになるということではなく”という表現はキートン女史の全篇の根本となっていると思われる。また、彼女は自然科学者ではないが、ロージャスペリーの学説を引用するなど、脳の研究をまた、遺伝子、ホルモンなどについても巾広い例証を展開している。そしてしめくくりとして、(この小論の性差心理学の関連のあるところ)男性、女性の非難しあったり、また嘲笑したりすることなく、将来に向けて、その性差のありようを認め合うべきだと言う。

#### あとがき

前回にも触れたように、ボーヴォワール、ベティ・フリーダン、バダン・テールにアプローチするべく取りかかったものの、特にボーヴォワールはその“第二の性”はこの女性問題・女性解放に重要なデータ・発言、そしてこの道の世界のリーダーとして広く全世界の女性から尊敬されている人だけに、この人のこと語らずしては、このことは語れない。ただ、あまりにもその偉大さに私などには少

し山が大きすぎる。しかし一つだけ、“ひとは女として生れたのではなく、女となるのだ”はもう神の言葉の如しか。また“女であることは男であることと同様に人間がつくり出したものです。この事実を証明する興味深い精神分析や心理学の研究はたくさんございますね”——しかし“第二の性”を書いた時、“女性の勝利は近い、と書いたのは早まった考えだった”との話。日本にも両三度、(サルトルとも共に来日したことも)来ているし、“女性問題を語る時は、ボーヴォワールは絶対の人のようだ。”

最近の、この“女性——性差、性差別”の問題やその研究は、次第に、生物学的研究、も著明で、この小論にも述べたように、“脳”の研究、発見により、少しずつ問題が複雑に入り込んで来ている様である。特に日本においては、例えば、大島清教授はその専門の領域より次第に心理学的問題への発言も注目される。

なお、更に広く、深い研究を追うべきところだが、今回はこれでおくことにしたい。

#### 参考・引用文献

##### A)

- (1) 「男と女 性差心理学への招待」 間宮武 1991. 10. 小学館
- (2) 「性の署名、問い直される男と女の意味」 ジョン・マナー、パトリシア・タッカー著 朝山新一他訳 1972. 12. 人文書院
- (3) 「ラブ・アンド・ラブシックネス 愛と性の病理学」 ジョン・マナー著、朝山春江・耿吉訳 1987. 1. 人文書院
- (4) 「ジェンダーと科学」エヴリン・F. ケラー著 幾島幸子、川島慶子訳 1993. 1. 工作舎
- (5) 「セックス&ブレイン」 ジョー・ダーデンス ミス+ダイアン・シモヌ著 池上千鶴子・根岸悦子訳 1985. 9. 工作舎
- (6) 「ウーマン・オブ・トゥモロウ」 キャシー・キートン著 菅原真理子訳 旺文社

##### B)

- (1) 「女性・その性の神話」 青木やよひ 1982. 10. 勁草書房

- (2) 「性の崩壊」 男と女の性差がなくなる時 上  
村くにこ 昭63. 10. フォーユー
- (3) 「脳から見た男と女 性差の謎をさぐる」新井  
康允 昭58. 12. ブルーボックス 講談社
- (4) 「女の脳・男の脳 大脳生理学が明かした こ  
の驚くべき性差」 大島清 昭62. 4. NON・  
BOOK 祥伝社

C)

- (1) 「第二の性」 ボーヴォワール著 生島遼一訳  
1966. 11. 人文書院
- (2) 「プラス・ラブ 母性本能という神話の終焉」  
エリザベート・バグンテール著 鈴木晶訳 1981.  
12. サンリオ
- (3) 「セカンドステージ 新しい家族の創造」 ベ  
ティ・フリーダン著 下村満子訳 1984. 5. 集  
英社
- (4) 「女という快楽」 上野千鶴子 1986. 10. 勁  
草書房
- (5) 「フェミニスト・セラピー 女性を知るために」  
ルイーズ・アイケンバウム+スージー・オーバッ  
ク著 長田妙子+長田光展訳 1988. 5. 新水社
- (6) 「セックス神話解体新書」 小倉千加子 1988.  
9. 学陽書房

D) 心のパッケージ No. 1 - No. 6 ブレーン出版  
社